はじめに

２００７年８月１日から３日の３日間、「第４回日本加速器学会・第３２回リニアック技術研究会」が理化学研究所共催により開催されました。会場は、埼玉県和光市で理化学研究所の近くの和光市民文化センター（サンアゼリア）を利用しました。当初、この時期の東京近郊の開催であるので猛暑が懸念されました。結果は長い梅雨期終了直後と、記録的猛暑期間の始まる直前のわずかな間隙であり、後にして考えるに、台風５号の影響で多少蒸し暑かったものの、まずまずの気候に恵まれたということなりました。

和光市で加速器に関する大きな会議が開催されるのは、１９９９年の第１２回加速器科学研究発表会以来８年ぶりとなります。 ８年前は理化学研究所和光でＲＩビームファクトリー計画がスタートして２年目の年でした。超伝導リングサイクロトロンの設計がたけなわで、プロトタイプのセクターマグネットの超伝導コイルが出来た頃でした。 その時はウランの最高エネルギーが核子当たり 150MeV 設定されていましたが、その後核子当たり 350MeV に変更されました。 ３台のリングサイクロトロンの建設は昨年中に終了し、１２月末に超伝導リングサイクロトロンよりファーストビームの取り出しに成功しました。本年３月末に核子当たり 350MeV のウランビームの加速に成功し、５月にはウランビームでＲＩビーム生成し新しい原子核の発見に至りました。 今回の学会は、そのような朗報が続いた直後の開催となりました。

会期２日目に行われた施設見学では、２６０名越える大勢の方に完成したばかりのＲＩビームファクトリーの加速器群とこれまでの現施設の加速器をすべてお見せする方針をとりました。 時間に制限がありかなりの強行軍でしたが、超伝導リングサイクロトロンをはじめ計４台のリンクサイクロトロンと入射器のリニアックを見学していただき、存分に堪能していただけたかと思っております。

５月はじめより参加登録を開始しましたが、当初参加者が少ないのではと心配しましたが、最終的に総参加者数は４５０人を越えることとなり関係者一同喜んでおります。 発表申し込みは、口頭発表７１件、ポスター発表２２５件となり、昨年にくらべやや少なめでした。企業展示につきましては、多くの企業より照会頂きましたが、会場の都合で３５件に限らせていただきました。スペース及び使用電源等制限もさせていただきました。 ご協力いただきました企業の方々に御礼申し上げますとともに、ご要望に応えられなかった点についてお詫びを申し上げます。

今回の年会では、加速器学会年会の今後あり方について話し合いの場が持たれました。加速器学会が２００４年に設立以来、リニアック技術研究会と加速器学会年会が同時開催との形をとってきました。その場合会議の名称が併記になり長過ぎるとの意見が出て、事前にアンケートをとることになりました。その結果大多数の人が「第M回加速器学会年会」と短くする案に賛成しました。ただこれまで通り、技術職の方にも参加しやすい会議にするため、加速器学会年会の中身を見直す必要があるとの意見が出されました。加速器学会は、学術的な議論の場と同時に、技術的な事柄を多いに議論しあう場でも有ることを明確にする必要がある。そのためには、技術的な議論の場であるセッションを設けたりあるいはシンポジウムを併設したりすべきとの意見が多くだされました。 今後このような方向で議論を重ねて行くとの方針となり、次回組織委員会にその動向が託されることになりました。

今回の年会にご尽力いただいた、組織委員およびプログラム委員の先生方に、末尾ながら御礼を申し上げます。 また会期前後にわたって奔走していただいた実行委員、准実行委員及び学会事務局の皆様に感謝いたします。

２００７年８月１０日
実行委員会委員長　加瀬昌之